

# 一読総合法を実践して

足利市立毛野小学校

津 久 井 稔

## (一) はじめに

われわれと一読主義との出会いは1964年1月、国語教育63号(明治図書)を手にしたときであった。当時のわれわれは、国語科指導について方法論の上でのいくつかの課題をもち、行きづまりを感じていたのであった。いいかえれば、確固とした指導法をもっていない混迷の時期であった。それが、「読む」「聞く話す」「書く」「B項」どこにも突破口はなかった。たとえば、読解においてあらかじめ準備されたいいくつかの発問を児童に与え、児童はそれに答える、いわば「対話」にて予定された路線に児童を引きずりこむようなことをやっていた。考えてみると、そこには、児童の興味や意欲や関心の度合いなどを無視した、試行錯誤的な学習しかなかつた。児童教師の「そうですね。」という返事を聞くまでは、ああでもない、こうでもない、と文章の中をはいざりまわっているだけだった。われわれの疑いはそこから出発した。それは、とりもなおさず、国語科の学習の主体性や科学性や、そのうえにたっての思考の問題をどう考えるかということだった。かけ出し者のくせに怠惰なわれわれはテクニックの向上をめざすよりも、てつとりばやい方法論のことばかりを探っていた。そのような状況の中で、われわれは一読総合法を伝統的な指導方法のアンチテーゼとして歓迎したのである。それは実にものめずらしさからであったと自状するほかない。ことわっておくが、われわれは児言研のメンバーではないので、児言研の提案をわれわれ仲間はある時点に立って、これを軽んじて科学として、学問として、受けとめたのである。偏見はおことわりである。

## (二) われわれが考えている範囲で

ここで、われわれが理解している範囲で一読総合法読解(以後一読主義と呼ぶ)の方法上の問題のたったものをときほぐし、以下の拙稿をより理解していくための参考にしたい。  
まず、概略的に(いいたりない部分は実践記録をお読みくださって推し測っていただくよう、はじめにお断わりいたします。)

一読主義は前記国語教育63号にもテーマとなったとおり、「実用主義か」ということにその焦点しづらられるように思われる。提案の主旨は次のようであろう。われわれおとなとの読書や児童の教室での読書の姿勢は一回の読みで完了するのが普通である。初めにざっと読んで、だいたいをとらえ、ついで部分を分析し、最後に主題をは握、表現を味わうなどという過程を経ることはない。つねに部分を理解し全体にせまるという過程をとる。たとえば複雑な内容、深い思想、むずかしい表現にありと、われわれは読む速度がおそくなり、ときには立ちどまって考え、傍線などを引きながら、ある程度さきを見通してなどいろいろな試みをして読み進めるであろう。この「立ちどまり」や「赤線引」(書き込み)や「見通し」を立てながら部分を分析、総合しながら読むことを教室にもちこんだのである。その読みの姿勢がそのまま、将来の読書のし方と同じことから、「実用主義か」と言われ

るのである。一読主義が一回しか読まない指導法などと思われているのは心外である。

### (三) 愚稿を列举し、その意図をくんでもらう

本稿のつぎに、

○ 書き込み、書き出しについて	毛野小	津 久 井	稔
○ 話し合い活動について	西 小	河 内 忠	之
○ 予想、感想、意見だしについて	山辺小	大 塚 晴	雄
○ 物語文の展開について	相生小	大 梶 直	佑

の4編が続く、その中で使われる用語およびその内容について、一応の了解を得ておきたいと思う。

#### ① 授業展開について

授業はいくつかの基本作業を通して、一定のプロセスを経て展開される。それをここでは物語教材を例にあげて述べることにする。

(1)教材のねらいをはっきりつかみ、学習計画をたてる。東書の教科書では、単元目標をおさえることにする。と同時にノート形式についても話し合いで決定する。すなわち、その教材の読み解きにあつたノートのとり方を決めるのである。例えば、主人公の行動や心理を時の流れにそって考えるとするならば、「時」の欄をつくり、そこには、時刻・日時・昼夜・年令、などを書き込み、「行動」の欄には、主人公の行為について書き、そのうらづけとしての心理は「心の動き」欄に書くという具合である。これらノート形式については、ほかの機会に詳しく触れたいと思っている。

学習の方向が決まったように、

(2)ついで「題名読み」を行なう。これについては、あとの大塚先生の説明にくわしい。「題名読み」によって形成された読みへの意欲はすぐに、冒頭部分の読みに引継がれる。部分の読みとことわるのには理由がある。前にも書いたように一読主義は部分から全体へ、分析から総合へと深化されるのであるから、書き出しの一語から読みはじめて、ある所で止めなければならない。これを「立ちどまり」と呼ぶ。

(3)ここで「立ちどまり」についてどのような意図のもとにどのような方法で行なうかを簡単に述べておきたい。

一読主義は、部分の分析からはじめることを大原則としているので全文通読は行なわない。それは、全文通読によって、内容をおおざっぱに理解してしまうことからひき起こされる。さまざまな弊害から解放するためである。プロットのわかつてしまつた作品をあとから、評論家的な視点から分析し検討することは、あまりにも知的な操作のように思われてならない。そういうことでは、「心情を豊かに」という指導要領の第一目標にもとるのではないかと思うのである。

それでは、どのようにして、「立ちどまり」部分を決めるかといえば、それはあくまでも児童の意見にまかせるのである。といつても教師が手をつかねているわけではない。教師はあらかじめ目標をもって予定しておかなければならぬ。それは一般的には、一文で立ちどまる場合もあるし、形式段落の場合もある。教材によっては、場の理論にあわせて場の交換をこの基礎とすることもある。いずれにしても児童がその部分をどのような意味においてでも一まとまり、一区切りと考えることによつて「立ちどまり」は決定される。つまり児童が主体的に問題をもち、読みの姿勢を確立しているな

されるのである。具体的には以後に掲げる各論によって、その実際をみていただきたい。

#### (1)書き込み、書き出し

解説の範囲が決まるとついで默読、指名読みとともに、「書き込み、書き出し」が行なわれる。簡便にいえば、教材の行間やノートに自分の発見した問題や意見や感想を思いつくままに書きこむことである。そのとき、読みの構えの中に、あらゆるものとの関係づけや表象化なども重要な要素として在しなければならない。「関係づけ」については、相生小大樹教諭の記述にくわしいからそれによせていただくとして、ここで「表象化」について、ふれておくことにする。

【表象化】については、いろいろ議論のあるところであるが、ここでは、次のように理解していただきがよいと思う。すなわち、文字表現されたものをイメージ化したものである。もっと動的にテビ化といつてもよい。

われわれの大脳は不思議な働きをする。それは「ことば」という概念をもった「記号」によって、いろいろなことを表象し、そして、それはことばの概念を超えて、複雑な思考と想像の心理的な働きによって文学体験を、そしてより深い文学認識を進める事になるのである。その表象は、ある児童にとってはクロッキーであり、ある児童にとっては色彩鮮かな量感のあるものとなろう。またある者は、その中に歴史を見、社会を見、倫理を見、あるいは生活の中の一部を切りとって、その文学形象の基盤とするかも知れない。とにかく、各人ばらばらの形象は、つきの「話し合い活動」によって修正や訂正や拡大が行なわれ、主題へのアプローチが意識されるのである。表象とは、たゞ「目に見えるように写った」ものをさすのではなく、そこにある真理やとりまく様々な様相に対しても関係づけられたものというべきである。いさか舌足らずの観があるが紙数の都合でこれだけでとどめなければならない。

(5)ついで「話し合い」が「書き込み」を中心にして展開される。これについては、西小河内先生のくわしい。

(6)この話し合いのまとめとして、事件の進展や主人公の心の動きなど作品全体に対するさまざまな予想、見通し」がなされることになり、場合によっては「表現読み」がなされて、その部分の読み完了する。「予想、見通し」については、大塚先生が十分に書いてくれている。そこで「表現読み」について書きたい。しかし、われわれの実践はまだ、その真髓にふれていないようだ。たゞ、「聞きゼロ」の状態で、自からの内容理解を音声化しているだけである。もし、そこに聞き手がいてもさしつかえないのだが、とにかく自分が読みとった形象を内容にあった発声、発音、強弱などあらゆる技術を総動員して、自分で気にいったように読むのである。これで文学体験を最高のものとしたいのである。このような部分展開をくりかえし、全文の読みをすすめるのである。

以上、授業展開について、その概ねを述べたのであるが、これらを解ったこととして各論にうつりたいと思う。

(津久井)

#### 「書き込み、書き出し」について

文字や文・文章はいろいろな顔つきをして読み手に迫ってくる。その語りかけにどのように反応するかが、読みというものであろう。それでは児童はいつも文章と語り合っているだろうか。わたしは児童の読みはいつも文章と対話しているのだと思っている。しかし、それがはっきりと意識されない

ところに問題があるとつねづね考えていた。児童はことばにならないことばで語りかけているにちがいない。それが教師の発問を手がかりにして、やっと明瞭になるのであろう。書き込み、書き出しはそれを自力でせるところに意義がある。それにもう一つ、児童の読みの姿勢の中でおとしてはならないものがある。それは読み進めているうちに心にのぼった、おどろき、疑問、歎声などは、おそらく授業中にはとりあげられなかつたのではないだろうか。「書き込み、書き出し」はそれもすくいあげることができるのである。要するに、文章から受ける感性的なものを、文字で表現することによって理性的なものに変えるのである。

そうはいっても、書き込みがそうすらとできるわけではない。そこにはおのずと文章に対する姿勢が確立されていなければならない。そのためにわたしはつきのような方法をとつた。書き込みの内容をいくつかにしほつたのである。

- 思つたこと、感じたこと、考えたこと、
- わかったこと、
- わからないこと、
- これからどうなるか(予想、見通し)
- しつもん、(ことばのいみも含めて)

これだけのことを読みの途中で書きこむのであるが、全員がすべての項目について書けるわけがないのである。こちらもそんな期待はしていない。やらせてみて、意外なことがおこつた。その1は、「思ったこと」というのはだれにも書けるということである。それは単純な第1次信号的なもの、原始的な要素が多分に含まれているからである。その2として、専門家があらわれたことである。というのは、ことばの意味を質問することだけを書きこむ者、年代計算のように、算数の計算ばかりやる者、(たとえば、伝記文のときなどに多くみられる。)登場者の心情ばかりを気にする者などである。しかし、それも共同学習の場に提出されることによって重要な意義をもつことになる。そして、それがやがて、一般化され、めいめいによって豊かな表象と結びつくことになるのである。書き込みはやがて語法や文体論にまで発展し、あらゆる角度から文章の分析が行なわれるようになる。

書き込みについて、もう一言、つけ加えるならば、それはつきの話し合い学習のたねであるということである。書きこんだ感想や意見や、言いかけや予想は話し合いで修正されたり、訂正されたり、深められたりする。また、わからなかつたことが話し合いで明らかにされるのである。

つぎに補充教材として、6年生に与えた、「くもの糸」(芦川龍之介)の実践例をあげる。(2学期後半のころのものである。)

### くもの糸

- 題名の傍にもいろいろなメモがみられる。
- くもの糸で何かをつくる話。
- くもの糸で事件がおこりそう。
- くもが糸を出しているのをだれかが見る。

作品によってはこれを中心にいろいろな話し合いかがなされるが、この作品ではこの発表だけ、本文にはいった。

②ある日のことでございます。②おしゃか様は<sup>①</sup>ごくらくのはす池のふちを、ひとりでぶらぶらお歩きになつていらっしゃいました。池の中に咲いてるはすの花は、みんな玉のようになつて白で、そのまん中に金色の<sup>③</sup>すいからは、なんとも言えない、よいにおいが、絶え間なくあたりへあふれています。<sup>④</sup>ごくらくはちょうど朝なのでございましょう。

- ・(①と④を線で結び)ある日のごくらくの朝のこと、①死んだ人が行くところかな・天国のこと
- ・まあ茶<sup>②</sup>・おほんにはすの花をかざる<sup>③</sup>中心にあるものだな、
- ・敬体の文章に出会ってとまどっている感がある。そして、文章そのものに対しての書き込みが多くなった。・読んでやわらかい感じがする。敬語ばかりで書いてある。ふつうの物語はこんなよいことを使っていないのにこの作者はちょっと変った人だ。・朝をあらわすのにぴったりのことば。気もわりい文だ。④の文のつづけ方がいい。・ふつうは①の文の次にある。

①やがておしゃか様は、その池のふちに<sup>①</sup>おたたずみになって、水の面をおおっているはすの葉の間から、ふと下のようすをごらんになりました。②このごくらくのはす池の下は、ちょうど地ごくのそこにあたっておりますから、<sup>②</sup>すいしょの<sup>③</sup>ような水をすき通して、さんずの川や針の山のけしきが、ちょうどのぞきめがねを見るように、はっきりと見えるのでござります。

①立っている・お立ちになって②テレビのマンガにこんなのがあった・じごくごくらくとなりどうし②きれいな水・しみず③・悪いことをすると針の山へ行かせるという話がある・これは小さいころおかさんになん回となく聞かされたことと同じだ。伝説らしい。・おしゃか様がのぞいているとか事けんがおきてているのではないか。針の山のことを考えたらおしりがむずむずした。

①すると、その地ごくの底に、<sup>①</sup>カンダタといいう男がひとり、ほかの罪人といっしょにうごめいでいる姿がお目にとまりました。②このカンダタといいう男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大どろぼうでございますが、それでもたった一つ、よいことをした覚えがございます。③と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さなくもが一匹、道ばたをはって行くのが見えました。そこでカンダタは、さっそく足をあげてふみ殺そうといいましたが、「いや、いや。これも小さいながらいのちのあるものにちがいない。そのいのちをむやみに取るということはいくらなんでもかわいそうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうそのくもを殺さずに助けてやったからでござります。

①日本人ではないな・主人公らしい・②虫みたいな感じだ・針の山へのぼらされたろう。②少し心がある。殺人放火ごうとう・③人を殺してもを殺さなかったのは変だ・人間だからよい心がすみの方にあった・人間は根っから悪い人はいないと聞いてる。このカンダタの心がそうだ・この心がけを人間に使ってくれたら。深い林の中の小さくもというの芥川のどくとくの感じ方だ。お

しゃか様が天ばつを与えているところを小さなくもがきて助ける。

①おしゃか様は地ごくのようすをごらんになりながら、このカンダタにはくもを助けたことがあるのをお思い出しになりました。②そして、それだけのことをした報いには、できるなら、この男を地ごくから救い出してやろうとお考えになりました。③さいわい、そばを見ますと、ひすいのような色をしたはすの葉の上に、ごくらくのくもが一びき、美しい銀色の糸をかけております。④おしゃか様は、そのくもの糸をそっとお手にお取りになって、玉のような白はすの間から、はるか下にある地ごくの底へ、まっすぐにそれをおおろしなさいました。

①ほうび②みどりかな③カンダタが助けたくもかもしれない④糸はとどくかな。糸は細くてのぼれないのじゃないか。くも一びき助けただけでごくらくへ行けるのかな。カンダタはおしゃか様に助けてもらえるなんてゆめにも思っていないだろうな。カンダタは助かるかな。カンダタはおしゃか様のでしになるかもしれない。おにがおいかけてくるだろう。

①こちらは地ごくの底の血の池で、ほかの罪人といっしょに、浮いたり、しづんだりしていたカンダタでございます。②なにしろ、どちらを見てもまっ暗やみからほんやり浮きあがっているものがあると思いますと、それは、恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといったらございません。③その上あたりは墓の中のようにしんと静まりかえって、たまに聞こえるものといっては、ただ罪人がつく、かすかなためいきばかりでございます。④これは、ここへ落ちてくるほどの人間は、もう、さまざまな地ごくのせめ苦につかれはてて、泣き声を出す力さえなくなっているのでございましょう。ですから、さすが大どろぼうのカンダタも、やはり血の池にむせびながら、まるで死にかかったかわざのように、ただもがいてばかりおりました。

①ごくらくの池はすきとおっているのに地ごくの池は血の池・血の池では気持ちがわるいだろう。ごくらくのうららかさにくらべて地ごくのおそろしさはひどい・地ごくでは動かかないで血の池か針の山にいるんだな・地ごくのようす、まっ暗、血の池、墓のように静か、かすかなためいき・悪いことした人がたくさん浮いたりしづんだりしている④かわいそうな罪人たち・血の池からごくらくは見えないのかな・こんなことなら悪いことするんじゃなかつたと反省している・死んで地ごくへきたのにまた死ぬのかな・こんどはたましいを殺すんだろう・死ぬほど苦しいめにありんだな。。ここへくものがりてくるのだと思う。

### 中 略

①おしゃか様はごくらくのはす池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしゃいましたが、やがてカンダタが血の池の底へ石のようにしづんでしまいますと、悲しそうなお顔をなさりながら、また、ぶらぶらお歩きになり始めました。②自分ばかり地ごくからぬけ出そうとするカンダタの無慈悲な心が、そして、その心相当なばつを受けて、もとの地ごくへ落ち

てしまったのが、おしゃか様のお目から見ると、<sup>(3)</sup>あさましくおぼしめされたのでございましょ  
り。

①くもの糸はおしゃか様が切ったのではなくて、おれだけが助かりたいという欲が切った。もう浮か  
でこないだろう。かわいそうだけれど、おしゃか様のやさしい心にそもいて他の人のことを考  
えなったのだから天ばつだ。②おしゃか様もカンダタがかわいそうになった。助けてやるのをあきらめ  
・自分のことのように悲しい。ぶらぶら歩いて悲しさをまぎらしている。悪い心をもった人の心を  
くえなかつたのが悲しい。③心がせまなくてきたなくおおもいになる。

以上、児童の書き込みの中から、ランダムにひろい出して、ら列的に挙げてみたが、児童の感性や  
筆から一歩はなれたところに立っての見方など、ときにはっとさせられるものがある。書き出しに  
ついで記すひまがないが、書き込みと同じ態度でノートに書くことであるからここでは省いておく。  
ふ足りない部分はこのあとに続く諸氏の筆にまかせることにしたい。――この項おわり――